

光明

第八卷第十一號

大真日本 光明團本部發行

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)
大正十五年十一月十五日發行(每月一回十五日發行)

光明 第八卷第十一號

定價金拾錢

本領

毀譽褒貶に動するなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に精進せよ。

救はれたる者は立つて、全人類救済のために熱と血と涙とを以つて、念佛報謝宣傳のために、濁亂の社會に精進せよ。

合掌宣言

念願

第一、我は之れ久遠劫來の業苦に悩む。されど、傷き痛み悩める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我はこれ會無一善唯知作惡の凡夫。如來はこれ若不生者不取正覺の本願力に生きたまふみ親。罪惡深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひたまふ。

第三、恵まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘しき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたまふ永遠の光明。聞せん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。

第四、希くば自力小我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生ん。

第五、『四海の信心の人は皆兄弟。』其處に共存の涙わく。共に和ぎ、慰藉し、策勵して、相愛に生きん哉。

一。自信教人信。自分ばかりが喜んでゐないで縁のつながる隣人に一味の法悦を分かちたい。

一。報謝。ご恩づくめの中に生きてゐることに感激して、身を粉にしてゞも報謝の生活が營みたい。

一。俗諦。無明の酔のさめぬに重ねて毒酒をすゝめぬやうに。教育勅語戊申詔書の聖旨にかなふ忠良な國民になりたい。

一。向上。一生の間、知識先輩のみ教に聞き、念佛三昧信仰生活の向上を計りたい。

一。提携。外への戦の爲でなくて、自身教化耕養のために確乎たる團結提携を期したい。

庭の青桐の葉が色づいて今にもおちさう。

黃菊白菊が今を盛りと咲きにほふ。

眼が地上をはなれて天空を見つめる。

おゝ何たる偉きさぞ。

眞蒼い晴れ切つた大空！ 其處に一點の曇りもない。

眼をつぶる！ 幻がうかぶ。

一つ一つはつきりした顔となつて現はれる。地上を超へた聖座。

そこには永遠に朽ちない、過去の聖者達が綺羅星のやうにならぶ。

あまりの神々しさに暗くなる胸！ 思はず合掌したい心になる。

あゝ、何も考へずに暮すにしては、あまりにも尊すぎる。物思はる

、秋。

愛する同胞よ健在なれ。

自然の法悦

住岡 狂風

福山市精神文化協會講演會第三日夜講演筆記——淨願寺に於て——

一昨日は『我と我の住む世界はどうして出来たか』といふ御話を申上げ、昨日は『法藏菩薩とは何ぞや』といふ題について御話を申上げました。今晚は『自然の法悦』といふお話を申上げて、此度の講演會の御別れで御座います。

親鸞聖人は『自然法爾』といふ言葉を使つて御自身の信仰を説明なさいました。如來の自然のおはからひによつて生きてゆき、自然のおはからひによつてお淨土に生れさせて下さることでもあります。

花が美しいのは花がちつとも自らはからはないで、自然のまゝに育ち、自然のまゝに花の美をあらはすからであります。

人工の美はごても自然の美しさには及ばないのであります。嬰兒が笑つてゐる様を見ては、盜賊も我を忘れて、嬰兒をそやしてゐたと申します。自然の相は、人をひきつけます。

しかし宗教生活における自然生活といふのは、花をながめてゐたりすることではなく客觀的に自然の美を見てゐることではなくて、如來の本願力のまゝに生きてゆくことでもあります。又自然生活といふことをはきちがねると、凡夫の心をまる出しにして、淺ましい煩惱の生活になつてしまひます。しかし決してさうではないのであります。人間性の全体を飾らないまゝが如來の光明に生かされることでもあります。

自然とは人が作つたことではないことでもあります。人の分別をどれだけ加へても自然にはなりませぬ。青菜をもつと太らせやうと思つて、溫くしてやるつもりで火をもつて來て青菜にあてたら葉は枯れてしまひます。信仰の世界で、若しこの人工を加へた時には、雜行雜修自力と云つて嫌はるゝのであります。

宗教がもつと廣まらねば國家の前途が危いと申す人があります。宗教が廣まつたら福山市の人心が立派になると考へてゐる人があります。私が法を求めるのは一家を圓滿に治めてゆくためだといふ人があります。紡績會社の社長や重役が、女工を求めて宗教の話を聞かして、騒動をたこさぬ豫防をしよう、宗教によつて懷柔しようとする人があります。或は又自分の友人が近頃宗教の書物をよみ、道を求めてゐる者がある。それに出遇つた所が、何時の間にか友人は、自分よりも深い考をもつてたり、六ヶ敷い言葉を使つたり、賢さうな議論をたてたり、深い人生觀を話したりするので、ごうも自分は友よりは、一目も二目も、いゝ正目もたかねばならないやうな隔がある、自分もそれから道を求めて、あんなにならふと、觀念統一のために道を求めやうとする人があります。更に、道徳だけではとても徹底的な善人にはなれないから宗教の天地に行つて、ほんとうに、清い尊い人にならふと思つて、信仰を得やうとする人があります。息子がごうも出來が悪くなつたので、息子をよくするつもりで寺に參れといふ親もあります。或は又、信仰を得た人を見れば、安心ある生活をしてゐるらしいので、自分も安

心ある生活をしようと思つて信仰に入らうとする人があります。更に又、信仰の人を見れば、何時も有難い／＼と云つてゐるから自分も感謝の生活がしたいと思つて宗教の生活をしようとする人があります。それらは丁度、極樂にまいつてやらふと思つてあせつてゐる御老人と同一の功利的な見方であつて、其處にとどまつてゐたならば決して眞の宗教の天地が開けて來るものではありません。それらは、祈禱や願がけによつて、足をなほしたり、眼をなほしたり、金儲けをたのんだりする、人たちの心持ちと大したちがひはありません。

極樂、國家、社會、福山市、家庭、會社、觀念統一、善人、よろこび、安心、息子の改善と、あげて來れば澤山ありませうが、それらを目的に持つての信仰は徹底せる信仰の天地、さきに申しましたところの自然法爾の宗教ではありません。親鸞聖人の信仰は信仰が信仰でおはり、念佛が念佛でおはり、信心が信心でおはつて、何等功利的の條件がついてたりませぬ。信仰が信仰でいゝのです。求道が求道でおはります。信心に満足し、念佛におはつてゐて、信心で何かを釣つてやらふとする野心がないのであります。

若し何かの目的をもつてゐるならば、功利主義の毒針に、信心の餌をつけて、如來を釣ることにあります。信心を道具に使ふのであります。その場合の信心は、頭でこねあげた議論であり、理窟にすぎなくなります。その信仰は自然の信仰ではありません。ほんどうの魂のよろこびを感じることは出来ないであります。自然の法悦はないのであります。今晚の聴衆を見れば、青年男女と智識階級らしい人ばかりで、老人の御同行はほんの僅かで、それも居眠りをしてゐられますが……（笑聲おこる）……其皆様さへ、先に一切を否定しますと、急にお顔色がさつと變つてしまひました。するとやっぱり何かのために信仰を道具につかつてゐなさんと見えます。初めは、それであつてもいいがそれでおはるならば、自然の法悦は、味はれないのであります。本日晝席では、御老人の同行の方々に、極樂を目標にしての信仰即ち二十願の天地から出て、如來のみに生かされてゆくお話を致しておきましたが、お婆様方を笑ふ皆様は又、それと同一の世界にゐるらしいのです。それが、善人にならふと思つたり、家庭の治め道具に考へてゐるのちがふだけです。皆様が悪い顔をしてゐますが、これからなせそれではいい

ないかといふことについてお話を申します。

私が以前廣島市の南竹屋町にゐる時でありました。時々私が本部にゐます時、基督教の人たちが、路傍傳導をされるのであります。それを數回聞かして貰つたことがあります。すが、二十歳そこらの青年の方が立つて盛に説いてゐます。『皆様、神様の救ひを信じて下さい。イエスキリストの救ひを信する者は、善人となることが出来ます。私は酒に女に迷つたことがあります。けれども私は神様に救はれたのであります。酒ものみませぬ。煙草もすいませぬ。女の誘惑にも打勝ちます。女に心をけがすこともありません。』と申します。後の方から誰か『なに青二才が、其面をさげて女がほしうない。お前は一体自分を何だと思つてゐるのだ』とやじります。この青年は果して女がほしくないでせうか。そんな心を持つてゐないでせうか。私たちが善人となつて神や佛の救ひと結ばふとする時、時に善人になつたと自惚れて、善人といふ衣裳をつけて、其衣裳だけを神や佛に奉つて、あとに、ほんどうの自分が残つてはゐますまいか。一時なら心の

表面を緊張せたり陶醉してしまつて善人らしい氣持がおきて、心の底には寂しみがあ
ります。この基督教の青年は知らずしてこの虚偽に陥つてはゐますまいか。又ある程度
まで善人になつたとしても、道德を的にして弓を射れば、得たものも亦道德でありまし
て信仰ではありませぬ。

國家のためとか、社會のためとか、福山市のためとか云つたり、騒いだりする人は
大方皆であります。しかし今一步靜に考へて見たいのです。或る團員の方の御手紙にこ
んなのがありました。本年の新年宴會の時のことであります。其方の地方の所謂村の有
志の歴々が、新年宴會を開きました。席が出来ますと、村長、村會議員等、かはる／＼
立つて、堂々と演説をはじめたのであります。其一つ一つが、本村の將來だとか、新年
の覺悟だとか、國家のためとか、時間勵行とか、いろ／＼が立派な話であります。其團
員の方は靜かにこの大氣焔を聞いてゐましたが、やがて酒が運ばれて漸く酔ひがまはる
とそろ／＼田舎藝者が三味線をならしはじめました。時間がたつにつれて、席が崩れは
じめ、先の堂々たる國士たちは、藝者と騒動をはじめ見るにたねぬ場面が轉開され

て來まして全くさきの名演説とは打つて變つたものになつてしまひました。先の團員
の方は寂しい心地でそれを見つゝ念佛してゐたと申してありました。學生の演説會等が
それであります。『諸君！釋尊は三千年の昔に一切衆生に悉く佛性ありと叫びました。
キリストは、我れは神の子なりと絶叫し、我世に勝てり！と、生の凱歌をあげました。
我々はこの尊き心を向上させなければなりません……』と堂々たる辯舌であります
けれども、十九か二十かの時代に釋尊の如く叫ぶ。無邪氣ではあるけれども、これを學
生の空演舌と申します。話のための話であります。國家とか、社會とか云つて騒いでゐ
る者こそ案外危険であります。自分を忘れた空さはぎになつてゐなかつたら結構です。
そんな天地には眞の世界はありません。太陽は一度も、この木のためとかこの草のため
とか、この人間のためとか云つたことはありません。唯彼は彼自身として輝くだけであ
ります。彼自身が彼自身で輝くだけです。彼が勳章をくれと云つたこともなければ
善人だとか賢いとかの名前をほしがつたこともありません。彼は彼でゐるのでありま
す。それだからこそ、萬物の上に輝き、一切の上に生きるのであります。

佛の智慧を表はした言葉に『佛は空、無相、無願三昧に住する』といふのがあります。佛は空に生きてゐるといふのです。空といふのは、大空のやうに透つてゐるが、目に見えぬとかいふ意味ではありません。この空といふことは間違つて考へられてゐる言葉はありません。空と云へば、すきとほつて見ぬことだと考へられてゐますが、それはちがひます。空とは眞の智慧の天地でありまして、一切がこれだと固定したり、きまつたものがなくて、萬物が常に變化して、ちつともとゞまらず、固定せず動いてゐるそのまゝに生きてゐることです。頭で空の理論がわかつたのでなくて、我執や執着からはなれて、空に生きてゐることです。子供が變らぬものとして、たよりにしたり、金をかはらぬものとしてたよりにしたり、夫を萬代不易のものとして力にしてゐる人は、智慧がないのであります。それが、夫の心が變つたり、子供が死んだり、金力がでなくなつたりすると、はじめて目がさめて、佛の世界に生きて來ようといふのです。蓮如上人は『たとひ八萬のお経を皆知識として得てゐても、如來に生きないものは愚者である。たとひ、一文字すら知らない者でも、後世を知る者は智慧者である。』と云つて

ゐます。又親鸞聖人は『智慧の念佛すること』と申されました。諸行無常とか一切空とか云はれる天地に、云ひかへるならば智慧の天地にのみ信仰はあるのであります。太陽は何等の願をもちませぬ。功利的な目的をもちませぬ。佛の無願三昧の天地なども伺はれます。親鸞聖人の信仰には、信心の前に決して他の目的をおかなかつたのです。信心が信心として輝きました。若し善人になつたり、觀念の統一をしたり、聖者になつたり、國家をおさめたりすることの上に信仰を見やうとすれば、信仰は唯、手段であつて、目的ではありません。信仰そのものが目的であり、全体である時だけ、何の難りもない純一な一心一向の輝きが飾らない相の上に表はれて來ます。

私たちが求めるのは眞實であります。信仰の天地では、機の眞實と法の眞實と二種の眞實を問題とします。機の眞實とは私自身の偽らぬすがたをさして申します。法の眞實とは、その私を救ふ法が眞實であることであります。つまりらぬ譬ですが、例へば足を機とし、靴を法とします。私の足は十文半の足袋をはく足であります。大きな足ですから

格好のいゝ靴は間にあひませぬ。先きの小さい風のいゝ靴をはいておさまつて見た所で一町や二町は歩けもしますけれど、長く歩けば、私の足が死ぬるか、靴がこはれるかであります。その場合、無理が出来るのは、靴が小さいからであり、足が大きいからであります。人前を美しく見せてゐてもそれは美にかくれた、虚偽であります。靴も眞實でなく、足も眞實でありませぬ。私たちは人間性を殺すことは出来ないであります。人間性を殺して、美しく装はふてゐる時、それは一つの化城であつて、眞の生きた天地ではありませぬ。私は先日、山縣郡の戸内村本郷の支部發會の講演會をすまして自動車の人となりました。廣島まで四時間かゝります。私には妙な癖があります。きたないことを云ふやうですが、た腹に瓦斯がたまつて仕方がない時があります。それをたしなみで出さない習慣をつけました。澤山たまるとお便所で腹をもまねば出ないのです。ところが、其日一時間位のつてゐる頃から、腹がはりはじめたのであります。そしてだんだん苦しくなりはじめて、二時間もした頃は全くたまらなくなり出しました。手に汗して我慢してゐますが、死ぬるほど辛いのです。廣島につく一時間位前からは全くもてあ

ましてしまひました。作法だとか、禮儀だとか美しく装つた世界に習慣づけられて他の十数人の方々に自動車をとめて御迷惑をかけまいとする心のために、とうとう無理を通しました。おかげで其夜翌日の二日間、体をこはしてしまつてひどく苦しみました。人間性を如何に殺すことが出来ないかといふことを知らされます。作法とか禮儀とかの型は美しい。しかし若しこのまゝで猶數時間もたつてゐたら私は死ぬるのであります。足が痛くても痛くない風をしたり、お腹がたまらなくても、平氣な風をしたりすることは肉体のことですが、これらは共に不自然であります。心の世界も其通りであります。一つの型にはめて、心を殺してゐる者が、それを信仰だと思つたり、眞實に生きてゐるのだと思つたら、大變な間違ひであります。善人にならふとか、賢い人にならふとか聖者らしくならふとかして、信仰を求めたつもりでなれば、それはこの小さい靴のやうなものであります。親鸞聖人は、自分といふ者が如何なる者であるかをほんとうに知られました。一切の宗教は、聖人の偽らぬ心を救ふことは出来なかつたのであります。人間性の全体を偽らず、飾らずなげ出した所にはほんとうの救ひの天地が開けたのであり

ます。如來の絕對他力の法こそ、親鸞聖人の全体を救つたのです。

信仰の美は化粧の美ではありません。鉛白や紅で作つた美は、どんなに美しくても眞の美ではありません。心の底から美しい心が輝いて、この心が、人間の健康と一絡に、肉体の上に表はれた時、如何に醜い女の上にも、美しさが見出せます。信仰の美しさは化粧ではありません。全ての化粧を洗つて、人間性のほんとうに立返つた底から、如來大悲の自然の本願力が人間性の全体を生かすのであります。ちつとも無理がないのであります。所謂生命の全解放であります。得られる何ももない世界であります。

すべての人が、これではどこかに無理がないか、うそはないか、ごまかしはないか考へて見るべきです。比叡山で、女もはしくない、肉も食ひたくないやうな風をしてゐることも聖人は出来たのです。けれども、その心をそつと山から下りては内所で満足して知らぬ顔してゐたのが所謂山法師たちです。足が痛いから時々人のゐない所で靴をぬぐのです。そして人の前だけで、善人らしく、佛法者らしく聖者ぶつて靴をはいてゐたので

す。親鸞聖人には、一切の靴がやぶれたのです。さうして一切の型の宗教、功利の宗教、不自然の宗教を古靴のやうに棄てたのです。やがてほんとうに自然な世界は恵まれたのです。

高い世界から下りやうではないか。國家だの社會だの、善人だの賢者だの、聖者だのといふよりも、私自身にかへつてゆかふではないか。國家だと云つてゐる間に、自分の心の火が消えてゐる。幻のやうに善人をわがき、ほんどの自分の間に信仰を入れたら、その信仰は、寂しい殻であり、概念である。

話をきいた時は、泣きたいほど嬉しいこともある。或は強く生きよの聲に強くなつた氣の時もある。でも人は何時までも、其涙をついけ、其氣のはりをつづけることが出来やうか。くつろいで日向ぼっこをしてゐる時もある。泣いたのも一時である。感激したのも一時である。たゞ一時の自分をほんどの自分だと思つて、其すぎた世界をとり出して、それを今の自分に間に合はせることは出来ぬ。或は甘たるい空氣や、嚴肅な空氣に一時自分をよはしてゐても、其處はみんな一時の化城である。靴が破れてしまつてゐる

ことを知らねばなりません。靴をぬいでごまかしてゐることを知らねばなりません。

親鸞聖人は、外に賢善精進のすがたをあらはして、内に虚偽をいだいてゐることを大變にきはれました。私どもの住む世界はこの外がはを美しく見せかけることを繰返すために、こんないやな、醜いきたない世界を造出したのです。會社につとめるために履歴書一通書くにしても、上手に書いて高く買つて貰はふ。實力よりも賢く見て貰はふとします。それがだん／＼大くなると、明日ははげてもう／＼から今日だけ、どうにか胡麻化せばいゝといふ商人根性が出て來るのです。

哀れなる衆生は、一點の虚偽をゆるさぬ。宗教壇上ににいてすら、この商人根性を出さうといふのです。一切の幻が去り、一切の自惚れがなくなり、ごまかしに目がさめ大地におりた時にこそ、眞實の信仰が生れます。これを法に約して申せば、眞實の法に出會つてのみ、眞實の機の世界が見えて來るのです。私どもは、眞實の法にふれねばなりません。眞實の教を聞かねばなりません。眞實の教とは聖人は大無量壽經と申されました。眞實の法とは、一切衆生に『男もいらぬ、女もいらぬ、善人もいらぬ惡人もいら

ぬ、智者もいらぬ、愚者もいらぬ、一切の差別の相がいらぬ、唯、至心に、信樂して、我が國に生れんと欲へ。』どの如來の本願若し生れずば正覺とらじと誓ふ如來の本願力のみが、眞の法であります。大地の底に感じられ信せしめらるゝこの如來の本願こそ私の智慧の眼を開いて、一切の偽善をぶちやぶるのであります。どうして偽善者に眞の合掌がよりませうぞ。どうして、自己を忘れたる惡魔に合掌がよりませうぞ。

見よ、親鸞聖人は、法の眞實を獲得した。さうして機の眞實にかへつた。彼が大地の上に地獄一定よとぬかづける所に何の虚偽があるだらふか。

佛教の根本が、煩惱をなくして菩提を得ることではなかつた。煩惱を棄てず、しかも煩惱のまゝにおはらぬ所に釋尊のさとりがありました。煩惱は炭であり、佛心は火である。煩惱の炭をなくすれば火もなくなる。炭にペンキをぬりつけたり美しい紙につゝんだところで、火にはならぬ。

如來がねん身自らを煩惱の上に顯現したまふた時、我等は信心を感じる。私が如來を信じて、善人になるのではない。

如來が、如來を信せしめて、惡人たる自覺を得さすのである。

私は聲を大にして云はねばなりません。他力とは無力ではない。

私が如來を信するのであるならば、信仰は、必然のものではない。必ずではない。必然でないならば、自然ではない。

如來が私をして如來を信せしめるのだ。如來が如來を信せしめるのだからこそ信心はそのまゝ、凡夫のきかない心でなくて、佛心であり得るのです。必ずであり、必然であり自然であり、他力であります。

乃木大將は華族になりました。大將、華族、勳一等、年金、學習院々長、ご様々のものが與へられました。しかしそれは、大將の目的物ではなかつたのです。大將は明治十年の戦役に聯隊旗を敵の手にとられました。ゆるすべからざる不忠義の臣だとの自覺が最後まで貫きました。しかし、明治大帝の御仁慈は常に大將をして奮ひ立たせたのであります。陛下御自身のみ心が、大將の上に動いて、大將は一生この陛下のみ心に生

きました。忠義が忠義でおはり、奉公が奉公でおはつたのです。この純忠に對して、自然に報いられたものが、華族であり、勳一等であり、功一級であります。若しも華族になること、勳章と、年金とを目あてにして忠義を手段にする者があるならば、彼は大臣であります。功利主義のかはりに忠義顔して陛下をけがし奉るものであります。どうして眞の勳章を與へることの出来る忠臣であらふぞ。若し彼等にして、あやまつて華族を授けられ、勳一等を授けられるならば、高慢の種にするであらふ。大將は下萬卒の満洲の野に枯れはてたことを思ふ時、そして上 大帝の大御心をあふぐ時、どうして高慢の鼻をうごめかすことが出来るやうぞ。

菩薩の道は上菩提を求め、下衆生を化益すると申されます。聖人は上如來に歸命、下一切衆生の罪業を、自己一身に見出す時、どうして信仰を善人がほと結ぶことが出来るやうぞ。私の信仰は家庭をおさめるためだと云つてゐられませうぞ。しかしながら、自然の信仰であります。何も出て来ないのではありません。國家もきよまりませう。社會もよくなりませう。福山市もうるほひをもつでせう。家庭も救はれて来るでせう。安心

もあります。よろこびもあります。特に先日ごくせんじつの源哲勝氏みなもこつせうしの言葉ことばを借りるならば『悪人あくにんは悪人あくにんでも光ひかりの輝かがやく悪人あくにんである。親鸞聖人しんらんぜんじんは悪人あくにんだと云はれたけれど、人に拜おがまれてゐる。後光ごこうのさした悪人あくにんだからである。これこそ眞しんの善人ぜんじんである。』と云はれるであります。

淨土じようどを、はからひの手てを出だしたものが淨土じようどに往生おうじやうするのではありませぬ。自然じねんの信しん仰やうから淨土じようどがでて來るのです。

念佛ねんぶつの聲こゑの裏うらに自分じぶんを偽いつはつたり、感情かんじやうの美うつくしい陶醉ごうすいの霧きうに自分じぶんを見失みうしなふた人たちは所詮しせん、化城けぢやうにどまつてゐるのであります。ましてや、信心しんぐや信仰しんぐうの概念がいねんをさへも我わがものらしく、高く掲あげて、他ほかに誇ほこつたり、高慢かうまんの種たねにしたりするのは、見てゐるさへ嫌いやな、我執がしゆであります。どうして永劫えいこくの地獄ぢごくがまぬがれませうか。つくられた高慢かうまんにどうして自然じねんの法悦ほうえつがありませう。

人間線にんげんせん上に生きやうではありませぬか。大地だいちに跪ひざまづかうではありませぬか。家いへの中なかは借金しやくきんの火ひの車くるまである者が、堂々どうどうたる門もんがまへの家いへにゐて、人前ひとまへを張はつてゐる所に、どう

して自然じねんの法悦ほうえつがありませうぞ。かへりませう。おちませう。機きの眞實しんじつにかへりませう。安やすらかなる眠ねむりと、くつろいだ心こころからのよろこびが、その底そこから自然じねんに生うまれて來きます。春はるが來たら木きの芽めがのびます。力りきもありませぬ。無理むりもありませぬ。

我 執

地獄ぢごくの中に、この世よで悪いことをしたばちが澤山たくさんおちてゐました。どれもく惡わるいことをした報むくひで苦くるしみぬいてゐました。一人ひとりの沙門しゃもんがそれを見みました。知合しりあひのばちが地獄ぢごくにおちてゐるのを見みしたので可愛かわいいと思おもつて、助たすけてやらふと思おもひ、其そのてがかりをたづねましたがなくありません。一度いちどもよいことをしたことがありません。しかしよく調しらべるとたつた一度いちどだけ、よいことをしてゐます。それは、慈ねがを一本誠ほんまこころの心こころから供養くやうしてゐります。そこで御出家ごでつかけは、慈ねがを一本地獄ぢごくにたらしめてやりました。老婆はははよろこんで其それにさばりつきました。すると多くの罪人ざいじんたちも、次つぎぎくそそれに鈴すずなりになりました。眞實しんじつは權威ちからです。他ほかに奪うばはれるものでも、與あたへられるものでもありません。然しかるにばちと思おもひました。『これはわしが見出みいだしたのだ。わしを救すくふつなのだ。』

わしがと思つた時、ぶつとされてしまひました。わしが出したいのは、恐しい人間の我執であります。一切の功德を亡ぼすのであります。永遠の迷ひはこの我の上にたてられてあります。私の心は迷へる人間の凡情であります。如何なる大げさの善事へでも、一度この『わし』といふ考へが頭をもたげた時、決して尊いことには見なませぬ。如來から恵まれ、如來から與へられた生命こそ信仰であります。どうしてわがものがほに出来ませうぞ。しかし私どもは、この如來の生命であることを忘れて我がものがほにするのであります。

『それ慮んみれば、信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起し、眞心を開闡することは、大聖矜哀の善巧より顯彰せり。』

と聖人はおほせられました。信仰を得させて頂くことは、凡夫の我がつのである。なくてはなくて、如來選擇の願心からおこされられたのであり、大聖の御親切によつてあらはれたのである。御言葉であります。私の願心がそのまゝ、私よりも先づ如來様の願心であったのであります。『我』が出るのは、如來の自然のおはからひを忘れて、自分を骨張します。

てゐるのであります。自分を骨張する者は、必ず、知らず識らず、高慢になつてゐます。

高 慢

高慢の鼻が動いてゐる時は、醜いものであります。或る日を高慢に暮す者は、或る日きつと、自分を卑下して、自分の日暮をいやしめます。弊といふのがそれです。或日には弊惡卑下の心に暗くなり、若し順よく行けば、高ぶつて來、順惡くゆけば、暗くなつてしまふのであります。いづれも生きる天地を見失ふてゐます。佛の道は尊重の日暮をさせて貰ふのであります。卑下でもなく、高慢でもなく、尊重の生活こそほんとうであります。自分を尊重し、他人を尊重してゆくのが釋尊のみ教であります。

一生臺所で働いてゐる奥様が、私のしてゐることは、これでいゝのか知らん、つまらぬことだと暗い顔をしてゐます。それは自分の生活を尊重することが出来ないのです。臺所の隅で、育児と炊事で暮す人必しも、つまらぬことはありませぬ。しかしこんな

奥様が、若し大金持になりあがると、すぐ高あがりして、下女をよびすて、自動車上に人を見おろす人になるでせう。ごちらも自覺ある生活ではありません。もう何の役に立ちさうもない老女でも、釋尊は尊重なさいました。人間の價値はいづれも絶對であり、平等であらねばなりません。今の世は、社長は價値が高いが小使の青年は輕いと思われれます。しかし何でもなければ青年のした事でも、時の大臣方がお揃ひで、大臣をやめさすの、やめるのといふ大事件もおきます。一人の青年が狂ひ出すと周圍の大人たちが大勢で騒ぎ出します。平等に重く見ないから罰があたるのです。いかに小さい仕事をしても、其生活に尊いものが與へられた時どうして卑下出来ませうぞ。米屋は米屋で結構です。大工は大工で結構です。

話がそれて來ましたが、親鸞聖人は、無理のない、ごまかしのない世界に生きてゐられました。念佛も自然です。合掌も自然です。一切は、人間の業でありながら、人間を超えたものゝおはからひでありました。自然の淨土がまつてゐます。

一切を如來にまかせて (其二)

本部傳導課 釜 瀬 紫 線

秋！

大地が冷たく冷たくて樹々はふるふる様に散つて逝く死の扉の前にたゞむだ様な秋は内省する者に恵まれたる時であります。

銀の砂をまき散らした程美しい數知れぬ星の天空にまたゝく宵など窓邊によりすがつて色々なことを考へながら涙ぐみます。

あわたゞしい時の流れに蛆虫程の人間が美しい着物を着たと悦び、お食事がまづいの美味しいの、家が大きい、小さいのと泣いたり笑つたりしてゴロリ／＼動いてゐる中にどこかえおし流されて逝く。丁度賽の河原の子供がくずされても／＼泣きながら石を積み様に血みごろになつて努力してゐる私達のすべてが、死の魔の手の前に何の權威があろう。死の前にたつた時、地上には權威ある何物もない。

一本の煙草が煙になつてボロ／＼と落ちる様に人生は灰になるのだ！灰だ！灰を築く人間だ！

でも人間は灰だ灰だと知らぬ顔のしていらぬ人間だ。灰をかためてゐる様な生活！でもなさずには居られぬ人間！血みどろになつて築き上げた人間のすべてが灰になる！いゝえれ前自身が灰になる。そうしてこの灰を得る爲に、人間と人間とが血をすゝり合つて一緒になつて地獄を作つて落ちてゆく。

いつその事、死んでしまつたらいゝぢやあないか等と思つても見るが死ぬ程の勇氣もない弱虫の人間。りくつは何とでも云へる。然し人間には座つての理窟は何にもならない。

座つていたら食へない

ボンヤリしていたら着られない。

着なけりや寒い

病氣になる

死ぬる

死んでもいゝぢやあないか

いや死ぬることは大きらい

でも食うても着ても健康でも

死ぬんだ灰になるんだ

いゝぢやないか死ぬることなんか云はれてもそんなことは云うてゐられないのだ！

でも人生はこうなつてゐるんだ。

X X X X

もしも私達に興へられた人生が、これだけだつたら呪はずには居られません。人間の存在は呪はれたる者でなければなりません。

然し人生はこうまで不調和には出来てゐない。うれしいことには私達にはたつた一つ念佛申すことが許されてあります。

念佛申す

佛様が私を浄土に召して下さることは、念佛申すものゝ頂戴するうれしい自然の利益であります。何のはからひなしに、念佛申さして頂く。地獄と浄土をこへて、たい念佛申さして頂くこと。これは私達の初めてであり、終りであり、全部であります。た念佛とは悲しい聲をしてナマンダブツくと、口を上げたり下げたり、金魚が𩺰を食ふ様な浮いたことではありません。魂がつかれて自分自身をさえもて餘すまで、つかれ切つた時、靜に合掌して心にお念佛さして頂く時、

『彌陀の智願海水に

他力の信水いりぬれば

眞實報土のならひにて

煩惱菩提一味なり

念佛成佛これ眞宗

萬行諸善これ假門

權實眞假をわかずして

自然の浄土をえぞしらぬ』

こう謳はれたシンラン様の心持がうれしく、こざかわしい計ひをつけて、善とか惡とかと計ひ、念佛とか安心とか宗教とか哲學とか、小さな哲學の子になつて自然の浄土をわぞ知らぬ自分がはづかしいとさね思はれます。

暗い／＼雨の夜、あやめも分たぬ嵐の夜、光の道へ出た時のうれしいこと、闇が深くて光がうれしく、つかれた心は花とも語る。

『無明煩惱しげくして

塵數のごとく遍満す

愛憎違順することは

高峯岳山にことならず』

こうした塵數の如き無明煩惱に狂ふ中より念佛申さして頂く時だけ、如來の慈音を聞き、如來と語ることも出来ます。

山中峯太郎氏は私達をラツキヨカタマネギの様なものと申されました。臭い／＼と

この不足が不足で居たならば

その不足におかゝりづめのお阿彌陀様と

切つても切れぬ親子の縁があるとかや

男女善惡の凡夫をば

ちつとも働かさぬ本形にて

佛智不思議の一人働で

やすく助け得さすればこそ

超世の悲願ともなづけ

横超の直道とも申すなり

持った地ぐせの常として

稱へにやならぬ信せにやならぬ

大慶喜心を得にやならぬと

打つても叩いても

撫でくもさすつても

ごうもなれぬ身と知らずに

なれるものゝやうに思ふて

苦しむさまはいよ／＼凡夫

その凡夫の愚痴のすがたを

まいれる立派な身とせずに

六字のいわれを聞く一つで

落るころのそのまんま

まちははさぬの大願業力

これ故なか／＼愚痴無智の

凡夫の私が信じたり

疑ひ晴れたり出来ぬはず

信せず晴れぬそのまんま

とても聞かずに居れぬはず

聞て何ともないまんま

嫌でも参らにやならぬはず

淨土へまいる身になれば喜ぶまい

信じまいとは思ふとも

晴れて踊つて喜んで

念佛申さにや居れぬはず

まづそれまではぐづ／＼の

ぐづのまゝにてナムアミダ

うれしやのまゝナムアミダ

悲しやのまゝナムアミダ

廻り燈籠の繪の様に

命の油がつきた時

それが此世の暇乞ひ

鬼が出るか

佛が出るか

阿彌陀如來の腕次第

この歌は有難い心もちでよみます。

しく思つても可愛い思ひのみにひきずられてゆくことは愛欲の海に沈むのである。山にこもつて一心に精進してゐてくれることのみが嬉しいことである。こちらから歸れと云はない限りは出て來てはなりません。この言葉であります。一人出家すれば九族天にのぼる。在家宗教の開けない以前とは云へ、孝行とは決して母の側にゐることではなかつた。出家眞實の孝養は、己れまづ生死出離の大道を學び、其大功徳を以つて父母に廻向して共に無上菩提の臺にのぼること其の孝行であるぞと信ぜられてゐました。母は決して盲愛に支配せられる人では

なかつたのです。あつばれ大善知識となるまでは歸ることをゆるさぬ母の心には子を勵まするごいものが光つております。

慈母勸進偈

法に生きる者は肉親の愛も聖化されてゆきます。忘れることの出来ない母上のことを思ふにつけて、彼が三十歳を越えた或時和尚は『慈母勸進偈』といふを作つて母に贈りました。この偈は五言二百五十六句で出來てゐます。その偈文の中には

『悲母生育の故に 成長して人と成るを得たり 此恩徳を報せん爲に 勸進の偈を献じ奉る』

と先づ筆をはじめて、次ぎには三界は苦である。之を樂と思ふてゐるからいつ迄も、生死流轉するのである。女人は極めて罪が深く、人生は無常で老生不定であるから早く發心せねばならぬ。若し娑婆惡業のまゝに壽命が終れば地獄の苦が報いられるであらふと細く地獄の惨しい有様をうつし更に『只願くば我悲母 生死の由來を觀じて 早く世間の勤を抛ち 速に出要の道に従へ。』

とすゝめ、生死出離の早道は唯念佛門にしくものはないことをあかし、念佛の行者は阿彌陀如來が無邊の大光明を放つて攝取し

て下され、死後は極樂淨土に生れさして下さることを説き、それより極樂淨土の莊嚴を述べ、女人成佛を説き『唯願くば我悲母 勸進の文を承引して』念々唯、念佛して安樂國に生れたまへとすゝめ最後に

『願くば勸進の力によりて 一類皆往生し修行し道を具足し 大覺位を精進し給へ』と偈文を結であります。母は是偈を熟讀して念佛を専修する身となりました。

故山へ

比叡山は幾度か緑の衣を紅葉にかへ紅葉が散れば眞白い雪におはれます。秋來るごとに雁がねは飛び來れど、源信和尚は故

郷にかへるべき時も與へられなかつたのでありました。年月は流れ／＼で今ははや四十二歳にもなりました。九歳の年に國を出で、はや三十三年、一日として忘れ得ぬのは母上の身でありました。四明の頂に立つて大和路はるかに見下せば、そぞろ故郷なつかしきなるのでありました。母はさだめし七十の坂もこねて、老の腰かきみ、月に姿も弱りたまふであらふと思ふにつけても、秋の夜長に夢は破れて思ひは遠く走るのでありました。母上のねゆるしはまだ來ぬとは云ふものの、一度歸つて老たまへる母を見奉らふと遂に弟子二人を引きつれ

て横川のさそを出發されました。永觀元年九月の頃、京都をすぎ、宇治、奈良を経て葛城下の郡に入れば、葛城山は暮の色につまれつゝも昔の姿は變つてゐない。お、懐し！葛城山よ！故郷をはなれ三十幾年、幾度か我が思ひは遠く汝の上に馳せ來りしぞ！忘れられぬものは故郷の山川風物である。幼かりし日共に遊びし友を思ふにつけても、なつかしきものは小川のせせらぎ、默せる山容。今や源信和尚はなつかしの故郷へさしかつたのでありました。

備後一圓の旅

□福山精神文化協會、「亞細亞の光」上映（十月九日—十一日）

福山文化協會では九日から三日間「亞細亞の光」(釋尊成道映畫)を上映した。廣島市で本團が失敗した経験もあつたので、今度こそは全ての人たちが十分の計畫を用ひてやつたので、毎日大入満員。會社工場の団体軍隊、學校等の団体で晝は云ふまでもなく、夜も満員大成功裡に終をつげた。

□崇興寺（十二日晝夜）

崇興寺は福山市外川口村にある。以前から光明園の講演會には常に出席聴講下さつた方。大正八年の大洪水にやられたまゝになつてゐるけれど、來春から本堂庫裡全部新築になるさか。御院主は求道の方であり頭の新しい方である。

□眞光寺永代經法會（十三日—十五日）

眞光寺には今度立派な御座敷が出来たので、その落成をかねての法座である。院主古孝一貫師は全く法悦

の人であり、求道の人である。念佛の聲がたへない。心から有難い三日間を暮した。寺の後の山に松たけ狩をしたのも面白かつた。この眞光寺は堅田の源右衛門が死んで、墓場のある寺である。

□明圓寺歡喜院五十回忌、妙善院五十回忌、寂光院三回忌大法要講演會（十七日—廿一日）

所は頼、日東第一の景勝、明圓寺は頼第一の大坊、眞劍な同行の求道ぶりに全く嬉しい五日間の講演をすませた。院主様は眞に求道家であり、法悦の人である。青年にも目覺めた人があり、婦人會はなか／＼盛なもの、心から嬉しかつた。毎夜二時三時迄座談がはずむ

□寶珠寺及千田小學校（廿二日—廿四日）

千田村は、濟世軍の細川浩洋氏が毎月御出でる所である。寶珠寺に廿二日夜からゆく。眞言宗、法華宗も澤山ある所であるが、この村の不思議は各宗の人たちが眞宗寺院の説教をきくことである。特に藤井校長は熱心な眞言の行者であるのに、常に眞宗の講師をやこつて聞いてゐられる。細川氏が近頃は毎月一回、歎異抄について講話しておられる。廿三日の夜は小學校での講演會。五六百の人が集まる。青年團全員、大盛會で

あつた。校長先生は有難い事聞いてゐられる。廿四日の夜自動車で福山市中井氏へ。

□郷分村處女會講演會（廿六日、廿七日）

郷分小學校で處女會の講演會がある。静かな會。本團員野田女先生の御心配であつた。夜は高橋氏宅で一般同行に話す。この村は天理教、金光教の盛な村。

□福山精神文化協會講演會（淨願寺、廿八日―三十日）

福山市とはなじみ深い。最初の夜から満員である。夜の講題は「自然の法悦」、夜分は老人たちが少くなつて殆んど青年男女及智識階級であつたのも嬉しい。

□市村青年團講演會（廿一日）

福山市の東南市村青年團、晝は幹部講習會、夜は青年團全員及一般で多數の集合であつた。校長さんは主管の舊友北村金藏氏、氏の人格が學校にも青年團にも表はれてゐるのを見て嬉しかつた。青年にも生意氣が見えず、小學校にも何物が動いてゐるのが見える。健實なる發達を思はせる。夜十一時頃辭して福山市中井先生宅へ歸る。

□本部例會（十一月一日、二日、三日）

住岡主管、花岡、釜瀬、齊原、佐々木、吉藤、等が本部に集つた。例の通りに盛會であつた。臺様其他郡部

の團員も出席。

□東都へ（四日午後三時三分の急行）

今が一時半、今から一時間半したら東京行の列車の人となる。東都の團員の方々が首を長くしてまつてゐて下さるのが見える。一路平安なれ！さらばよ。

講演豫定

十一月

廿六日晚より廿八日晚まで

山縣郡安野村都々見

廿九日晚より三十日まで

同郡筒賀村井仁（未定）

十二月

一日―三日 光明團本部報恩講執行

四日晚より六日晚まで 豊田郡河内町

八日晚より十日晚まで

高田郡有保村保垣（未定）

十二日―十四日 山口縣小郡町（未定）

十五日―廿三日 下關地方巡禮

廿五日晚より廿八日晚まで

安藝郡熊野町支部

聖光 毎月一日發行

光明の姉妹雜誌です。信仰のことは書きませぬ。生活を向上徹底さす最良の友たらんことを期してゐます。皆様から大變な感謝を受けてゐます。

智識階級及青年男女は、是非御讀み下さい。

當分聖光の定價を、一ヶ年壹圓とします。必ず前金で申込み下さい。

十人以上御紹介下さいましたお方には、一ヶ年無代で差上げます。

誌代前納

一事が萬事です。半年も一年も前金切れのまゝである人が十人中五人あります。

机の上を見ただけで其人の一生がわかる。修養は小さいことからです。

前金切れの知らせがあつた時、すぐ振替で半年以上を御出し下さい。

大正十五年十一月十日印刷
大正十五年十一月十五日發行

本誌定價

一冊 金拾錢（郵税共）
一ヶ年 金壹圓貳拾錢

編輯兼發行人

花岡 靜人

印刷人

石佛 二郎

印刷所

石佛 印刷所

發行所

廣島市八丁堀二十六番地
大日本 光明團本部
眞宗 振替貯金口座ノ關貳參〇八番